



1 第51回日本音楽コンクールバイオリン部門で15歳という若さで1位に輝く 2 2018年6月、大府中学校での学校訪問コンサート。中学生を対象に3年に1度開催 3 2019年2月、市広報大使に就任



▲1978年1月1日号
新卒の期待と抱負



▲1983年4月15日号
プロの道へ進む決意



▲1999年8月1日号
桐朋女子文化会館開館記念
リサイタルチラス



▲1999年8月1日号
市初の芸術文化功労賞



▲2011年7月15日号
聴衆を魅了する竹澤さんと名フィル

「厳しい練習を乗り越え、コンサートを無事に終え、カーテンコールでいただいたお客さまからのスタンディングオベーションにとても感動しました。漠然とバイオリニストになりたいと思っただけで、語ります。バイオリン中心の生活で学校を長期で休むこともあった竹澤さんですが、学業もおろそかにしません。「授業ではとにかく先生の話を聞いて覚え、移動の新幹線でも勉強していました。バイオリンで培った集中力が勉強にも役立ちました」と話します。「先生方が私の活動を理解してくれ、同級生たちもリサイタルに駆け付け応援してくれました」と周囲への感謝も忘れません。

桐朋女子高校在学中、第51回日本音楽コンクールに参加し、当時バイオリン部門で史上最年少の15歳で第1位に輝きます。米国最高峰といわれる音楽大学「ジュリアード音楽院」在学中には、インディアナポリス国際バイオリンコンクールで圧倒的な優勝を飾ります。「音楽家にとってコンクールで優勝するということは、プロの音楽家のスタートに立つということ。優勝後のスケジュールはすさまじく、この賞をきっかけに各国とのマネジメントの契約をすることができました。憧れのカーネギーホールで演奏したときに、やっと一人前のバイオリニストになったと感じました」と振り返ります。

「好きなことを見つけて、人生を豊かにしてほしい」

世界を飛び回る傍ら、竹澤さんは平成18年から3年に1度、市内全中学校を訪問し生演奏を届けています。「音楽を通して何かしらエネルギーを伝えたい。人の心を動かし、好きなことを見つけていきたい」と話します。

その思いを語ります。バイオリニストの水野紗希さんやチェリストの佐藤桂菜さんなど、若い演奏家たちが大府から育っていることについて、「音楽に興味を持ち、活動をする人が増えるのはうれしい。一緒に音楽を通して市民の皆さんの生活を豊かにしていきたい」と話します。

市制50周年を迎える大府市について「私と大府市はほぼ同世代。まちが成長し、若い家族が増え、発展し続ける大府市は将来につながるまち。大きな未来を持っている若い人たちが長年大府を支えてきた人たちの生活を豊かにできるような、私にできることをこれからも続けていきたい」とふるさとへの思いを語ります。「将来的には大府市から世界に発信できるような音楽祭を開催したい」。世界の目が大府に注がれる日、その舞台の中心で演奏する竹澤さん。そんな日を夢見て、今日も竹澤さんのバイオリンの音色が世界中の人の心を魅了しています。



2011年7月、市音楽祭で名古屋フィルハーモニー交響楽団(名フィル)と共演

世界的なバイオリニスト 竹澤 恭子

>>>PROFILE 大府小、大府中出身。3歳でバイオリンを始め、小学6年生の時には市音楽祭で演奏した。1986年、世界三大バイオリンコンクールの一つの第2回インディアナポリス国際バイオリンコンクールで圧倒的な優勝を飾り、国際的スターダムにのし上がる。2006年から市内全中学生に生演奏を届ける活動を行っている。

「バ」イオリンがやっぱり好き。音楽が与えてくれた力は大きく、大作曲家が残した曲の素晴らしさは追及しなくなる魅力がある。まだまだ探究中です。そう語るの、世界で活躍する市出身のバイオリニストの竹澤恭子さん。

世界観を変えた演奏旅行

竹澤さんがバイオリンを始めたのは3歳のとき。「誕生日に両親からバイオリンをプレゼントしてもらい、すぐにスズキ・メソードに通い始めました。音楽の楽しさに気づいたのもこの頃で「親戚の集まりの時に、雷で停電してしまっただけです。怖くて震えていましたが、いとこが不意にバイオリンで演奏を始めたんです。怖さを音楽が打ち消してくれて、音楽って人を楽しくさせてくれると思いました」と話します。

バイオリンにのめり込み、努力を続けた竹澤さんは、小学1年生の時にスズキ・メソードの海外派遣団に選ばれ、米国などへの演奏旅行に出掛けます。初めての海外に不安を抱えていたそうですが「音楽は世界共通語。バイオリンが私の分身となって思いを伝え、世界とつながることができました」と懐かしそうに振り返ります。さらにこの演奏旅行は竹澤さんのその後に影響を与えます。